



大鵬がいたからこそ(上)

行きつけの寿司店

両雄並び立たずという場合もあるが柏戸は互いに立て合ったという印象が強い。昭和36(1961)年秋場所後の横綱同時昇進。同時期の相撲界を共にけん引してきたという同志意識が強かった。柏戸としては横綱昇進後、ケガや病気で大鵬に迷惑を掛けていたという意識もあった。

35年初場所初対決

柏戸と大鵬の初対決は35年初場所12日目。新入幕で11連勝した大鵬(西前13)の阻止役だった。当日は横綱戦そっちのけで、世紀の1番と言われたぐらいの注目度があった。対戦前、小結の柏戸は記者から問われ「オイ、番付を見ろよ。こっちは三役だぞっ」と強気に言い放った。大鵬が上がって来る前は自らが若手ホープの代表格。それなの

に2歳下の新世代があつと言う間に迫って来た。生来のんびり屋の柏戸の闘志に火が付いたのは事実だった。相撲は立ち合いから得意の突っ張りで先手を取ろうとしたが封じられて相手得意の左四つ。右上手も取られて防戦一方になったが、土俵を左右に行ったり来た



頭でもあった。

通算37度の対戦

ここから柏戸37戦(柏戸16勝、大鵬21勝)の歴史が始まり、終盤の大鵬5連勝までは16勝16敗の五分だったことは知られているところ。また横綱昇進前までの10戦では柏戸7勝3敗と優位を保っていた。角界の2年先輩である意地は十分示したのだ。

ただ横綱昇進後、柏戸はケガと病気に見舞われた。特に39年の糖尿病発症はまさかの事態だった。丈夫な体を持った自分自身への過信が招いただけに、ショックも大きかった。ケガの療養をしつつインスリンを打ちながらの生活。柏戸休場中の土俵を守った大鵬は順調に優勝回数を伸ばし、2人の実績は水が開いた。

柏戸時代の両雄。栃若時代を継ぐ者として期待された

どちらが天才か?

後年2人はどちらが天才かを比べ合った。柏戸は「大鵬のような天才とは一緒にしないでくれ。あの懐の深さ。体の柔軟さ。とてもマネできないよ」と自分の体が硬いこともあって、最大限の敬意を示した。一方大鵬は「柏戸さんは休場明けでも強いのが不思議だった。稽古も万全じゃないのに、馬力を持っていかれる。私にはとてもできない芸当だ。柏戸さんこそ天才だよ」と称えた。柔と剛。2人の特質を当人同士が言い合ったのだ。

柏戸は時津風一門、大鵬は二所ノ関一門と一門も違い、互いの事を知り合えるような長い地方巡業は別々であることも多かった。そうしたライバル関係が、縮まったのが昭和38年秋、柏戸涙の全勝優勝直後のアクシデントからだった。

|| 敬称略 ||
(富樫 嘉美)

ハワイ巡業で笑顔

○: 戦後初のハワイ巡業



が行われたのが昭和37年6月。戦後17年目で初だった。柏戸は前年横綱に昇進したばかり。明治以降、ハワイは日本からの入植者が多く、故国への思慕もあって相撲は人気だった。柏戸も歓迎のレイを受け、大鵬ともどもハワイ美女に囲まれ機嫌な表情を見せた。

毎週火曜日付に掲載